

原因、目的、そして行動

(ヨハネ九・一〜七)

二〇一四年のセウォル号沈没、昨夏の調布市におけるセスナ機墜落、そして先月のスキーバス事故。痛ましい事故が起こるたびに叫ばれるのが「徹底的な原因究明と再発防止に努める」という言葉。確かにこれらは「人災」だから原因の究明は再発防止への第一歩となるに違いない。しかし人の心や人生の諸問題において「なぜ」を問うことには注意が必要だ。たとえ「あの時」「あの人が」「あのことが」と言った「原因」を見つけてもその出会いや事実を変えることは出来ない。だからこうした原因追求は玉ねぎの皮むきのように私たちの心を疲れさせたり、より深い暗闇の中にその人を引きずり込んだりしかねない。

閑話休題。今朝の箇所はイエス・キリストによる癒しの物語であるが、その射程は単に肉体の回復を越え、心の奥底までのいやし、即ち救いに関わっている。以下、生まれつき目が見えないという事実に対する弟子たちとイエスの視点、更にはこの男に求められた行動について考えてみたい。

一、「原因」を探した弟子たち

ある日イエスとその一行が道を歩いていとひとりの男が座っていた。恐らく物乞いをしていただろうその男の口上を聞いてだろうか、弟子たちはイエスに質問をした。「先生、彼が盲目に生まれついたのは、誰が罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。」これは典型的な「原因探し」のロジックであり、かつ実に不慮なことばであった。もともと「悪行」と「不幸」を因果で結ぶ考え方は「ほら見たことか。行いが悪いからだ」などという軽口に代表されるように、私たちの間でもごく一般的な考え方である。だがたとえそれが事実だったとしても、そこから何が生まれるだろう。何も無い。全くの不毛である。そう考えると弟子たちの目は実に冷たいものであったことが解る。彼らにとってこの男のは話しのネタ（！）に過ぎなかったのだ。男の悲しみに寄り添おうとする思いなど彼らには微塵もなかったのだ。

二、「神の業」を見たイエス

この不躰な質問にイエスはどうか答えただろうか。まず彼は弟子たちの「因果応報」的考え方を明確に拒絶した。その上でこう言う。「神の業がこの人に現れるためです」。イエスは彼の不幸の原因を過去

に探さなかった。むしろ彼の今を見、それが神の業が現れるという目的をもったものであることを見抜いたのである。悲しみや辛い現実の中にあるものの心には未来や希望は消える。しかし神から遣わされたイエスはそんな彼に近寄り、彼の人生に具体的に働きかけたのだ。だからイエスは冷静な傍観者などではない。直接彼にさわり、古代では治療とみなされていた行為をして、彼の眼を開けようとする行動の人、関わりを持つ人、そして愛の人であった。

三、「信じ、従った」男

しかし「神の業」はその瞬間には起こらない。それどころかイエスはこの男に「行って、シロアムの池で洗いなさい。」と命じたのである。全く無理無体な命令である。この時点では彼の目は開いていないのだ。しかもシロアムの池はエルサレムの中で最も低い位置にあり、何段もの階段を下りて行かねばたり着けない。男はどう答えただろうか。「イエス様ひどいじゃありませんか。先ず癒してください」とネゴシただろうか。否、否である。聖書はごく簡潔に証言する。「そこで彼は行って、洗った」と。彼は人生に神の業をもたらすと聞いたイエスのことばを信じ、そして従ったのだ。人ごみに紛れ、ひよつとしたら懸命に助けを求め、手を引いてもらいながら

何段もの階段を下り、ついにその人工池の端で目を洗った時、彼の眼は開かれ、光を体験したのである。光なるイエスによって彼はまことの光を得たのだ。

* * *

夫は銀行員、彼女は専業主婦、三人の子宝に恵まれた家族の人生が暗転したのは昭和五二年晩秋のことだった。バドミントンの強化選手に選ばれていた長女が海岸沿いの道から忽然と消えたのだ。大搜索の甲斐もなく、テレビの呼びかけ番組にも出たが時だけが過ぎて行つた。いつしか彼女の家には有難くない訪問者が増えた。「子は親の鏡」「先祖のたたり」「因果応報」といつて宗教の勧誘をするのだ。彼女はひとり泣いた。そんなある日彼女はクリスチャンの友人から「この人が罪を犯したのもなく、両親でもありません。神の業がこの人に現れるためです。」という言葉聞いた。「何かが違う」そう思った彼女はむさぼるように聖書を読み、そして十字架のイエスに出会った。ご存じ横田早紀江さんである。彼女もまたイエスに出会って光を得たひとりだ。友よ、もし今不毛な原因探しをしているなら、今それを中断しよう。そして神の与えし目的を信じ、それにむかって踏み出そう。光はそこにある。